

山口大学医学部附属病院から笑顔と情報を発信するコミュニケーションマガジン

山大病院だより

1
2018

VOL.237

特集：◎2019年6月24日 新病棟開院へ



新病棟開院へ



山口大学医学部附属病院長

杉野法広



新年明けましておめでとございます。

今年が皆様にとってすばらしい年になりますようにお祈り申し上げます。

さて、本院では、現在、大規模な再開発整備が進行中です。そのシンボルとなる新病棟の建設は、順調に進んでいます。新病棟は、地上14階、地下1階の構造で、平成31年の6月24日に開院予定です。

新病棟の特徴は、高度急性期医療の充実であり、その柱の一つが、1階の先進救急医療センターです。20床すべてが集中治療の機能を備え、CTや血管造影装置も設置します。屋上にはヘリポートを設置し、全県からの重症の救急患者さん

の受け入れに対応します。3階は集中治療部（ICU）で、現在の12床から16床へ増床します。4階の手術室は、現在の12室から16室へ増やし、血管造影装置やMRIを完備したハイブリッド手術室を設置することで、高度な手術を迅速に提供できるようになります。

高度急性期医療のもう一つの柱となるのが、6階の総合周産期母子医療センターです。新生児の病床数を4床増やし、より多くの重症の妊産婦や新生児の受け入れを可能とします。

6階から12階は、入院患者さんのフロアです。職員の動線の短縮化、見通しの良いオープンスペースのスタッフステーションの設置などが特徴で、「見守りハイケア病棟」と名付けています。

新病棟は、災害時にも力を発揮します。災害が発生しても電源は確保され、先進救急医療センターや手術室、

ICUの稼働が停止することはありません。さらに、平時は講義や講演会で使用する1階の大講義室（オーディトリウム）は、災害時には広大なトリアージスペースとなります。

外来玄関からは、新病棟の建設状況が間近に見えます。様々な機能を備えた新病棟の完成を我々職員は楽しみにしており、県民の皆様にも、大きな期待を持っていただいていると思います。

本院は、高度な機能を幅広く備えた山口県で唯一の特定機能病院です。本院でしかできない手術や検査、治療などが多数あります。今年は、広報を充実させて、このような情報を発信し、皆様に本院の第一線の治療を広く知ってもらえるようにします。そして、県内だけでなく県外の患者さんにも最先端の医療を提供したいと思えます。山口大学医学部附属病院は、将来にわたって、皆様の健康を守ります。

最後になりましたが、今年も本院をよろしく願い申し上げます。



平成27年10月16日、新病棟の起工式を執行了しました。



平成27年10月、地下工事を開始しました。



平成28年1月、外来入口側の仮囲いパネルに再開発整備事業のコンセプト及び新病棟の建物概要を掲載しました。



平成28年6月、地下工事が着々と進み、作業・資材仮置用スペース確保のため、大きな鉄棧橋のような仮設構台を設置しました。



平成29年8月、5階床部分まで骨組みが上がってきている他、外来診療棟側の側面ではコンクリートの外壁ができています。



平成29年10月、鉄骨がすごいスピードで組み上がっており、8月末時点では何も無かった場所にも8階床部分まで骨組みが上がってきています。



平成29年11月、新病棟2階の建物内部・外壁では、扉・窓を設置するための枠の組立工事が始まっています。

新病棟の主な機能

屋上ヘリポート

屋上ヘリポートから、非常用・緊急用エレベーターを利用して救急、総合周産期母子医療センター、手術部、集中治療部へのスムーズな移動が可能



ホスピタルアート

8階小児科の病室まわりの26枚の扉の横にA～Zのかわいらしいモチーフを展開

総合周産期母子医療センター

NICUの後方病床であるGCUを増床することで、NICUの受入体制を強化(8床→12床)

輸血部・病理診断科

集中治療部に加えて、輸血部、病理診断科といった手術部と密な連携を必要とする部門を集約

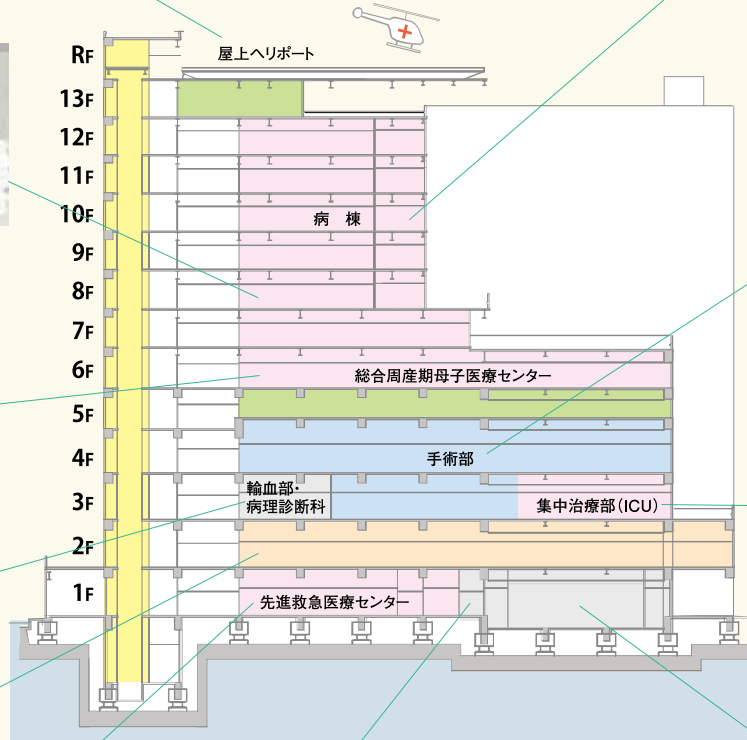
医療材料物流センター 薬剤部・栄養治療部

医療材料、医薬品、病院食といった供給部門を集約

先進救急医療センター

救急に必要な検査機器(一般撮影装置、CT、血管造影撮影装置)を整備(入院患者さんの検査含む)

平成27年からスタートした新病棟建設。2019年6月24日の開院に向けて、順調に工事も進んでいます。今回は、新病棟新営工事の様子を振り返るとともに、気になる新病棟の内部を紹介します。



病棟

患者さんの療養環境向上のため、個室を充実し、スタッフとの動線を分離



手術部

手術室増室(12室→16室)

- 一般手術室 8室
- 外来手術室 2室
- 特殊手術室 6室



集中治療部(ICU)

手術室増室に伴い、術後の患者さんの受入体制を強化(12床→16床)



大講義室(オーディトリウム)

講演会やセミナー等を開催
緊急・災害時にはトリアージスペースとして使用可能

店舗スペース

患者さんとスタッフのサービス向上を図るため、コンビニを設置予定

新病棟新営工事レポート



平成27年4月、前年10月から実施していた準備工事が終わり、いよいよ新病棟新営工事が始まる前の建設予定地です。



平成27年8月、工事用地の囲い込み作業を行いました。



平成27年9月、工事敷地内の建物(保健学科福利棟)の解体工事を行いました。



平成28年7月から、新病棟の病室モデルルームを設置し、介助動線や運用等の確認を行いました。



平成28年11月25日、山口県内の行政機関等向けの現場見学会を開催し、免震装置等を見学しました。



平成29年2月、地上階の床工事を開始し、高層階に効率よく資材を運べる大型タワークレーンを設置しました。



平成29年3月に地上階の骨組みを作る工事を開始し、5月末時点で3階床部分まで上がってきています。



就任の ごあいさつ

平成29年10月1日付で、第4代高次脳機能病態学講座(旧神経精神医学講座)教授を拝命いたしました中川伸(なががわしん)と申します。

私は札幌市の出身で、札幌南高校を卒業した後、金沢大学医学部に進学いたしました。当時の金沢大学精神医学教室による学生講義は、まだ階段講堂の中央に患者さんを連れてきて、皆の前で診察することが行われていました。その中に交通事故後に目が見えなくなつたと訴える患者さんがいました。いろいろな検査をしても異常が見られず、しかし現実には症状がある。このように不思議な、しかし患者さんにとっては非常に生活が障害されている状態を見て、精神医学



山口大学大学院医学系研究科
高次脳機能病態学講座 教授

中川 伸

に大きな興味を憶えました。そして平成2年に北海道大学精神医学教室に入局しました。そこでは臨床・研究・教育のバランスをとることが重視され、特定の学派などに偏ることなく、精神症状を診て、治療を行い、一方で日本でも最初に抗精神病薬を使用した教室として、精神薬理学による研究が進められていました。

医局、函館渡辺病院で臨床に従事し、大学院(解剖学第一講座)を修了し、イエール大学精神医学講座に留学しました。帰国後は後輩、他科の医師、研究者などと連携しながら、画像研究、遺伝子研究などの臨床研究にも幅広く取り組みました。一方、臨床(主に気分障害、認知症)教育にも力を注いできました。

近年の日本の精神科医療は大きく変動しています。治療としては日常・社会生活機能を回復させることまでが求められる、多職種連携が進んできています。領域としてはリエゾン、緩和ケア、移植医療の精神症状評価など他科との繋がりが広がっています。また、認知症を中心とした高齢者精神科医療も喫緊の課題です。講座としては最先端の研究を進めるとともに、これらの課題に対処すべく、実学を重んじていきたいと思えます。至らないところも多いかと思いますが、皆様方の一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い致します。

平成29年10月1日付で、放射線医学講座教授ならびに放射線科長を拝命いたしました伊東克能(いとうかつよし)と申します。「山大病院だより」をご覧いただいている皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は兵庫県姫路市出身で、昭和63年に山口大学医学部を卒業後、山口大学医学部放射線科に入局し、平成6年に大学院を修了し、学位(医学博士)を取得しました。平成7年からカリフォルニア州立大サンディエゴ校医学部放射線科、平成8年からトーマスジェファソン大学医学部放射線科に留学しました。平成11年に帰国した後、山口大学医学部附属病院放射線科講師、放射線部准教授を経て、平成19年10月に川崎医科大学放射線医学(画像診断)教室に教授として赴任いたしました。川崎医科大学ではちょうど丸十年さまざまな経験をさせていただき、この度、母校に戻る機会をいただきました。



山口大学大学院医学系研究科
放射線医学講座 教授

伊東克能

当初より肝疾患のCT・MRI診断に興味を持ち、慢性肝疾患における多相ダイナミックMRIの有用性や肝細胞特異性造影剤による肝細胞性結節の診断アルゴリズムの確立などの研究を行ってきました。その他にも空間選択的IRパルス併用非造影MRAによる門脈血行動態の評価などの血流イメージング、最近では、IRパルスを用いたシネダイナミックMRCPによる膵・胆道の機能動態イメージングなどの研究を行っています。

放射線診療におきましては、各診療科のご要望に応えるべく、迅速・正確な画像診断レポートの作成が最重要事項と考えています。検査終了後、できる限りリアルタイムで診断レポートを作成し、各診療科の端末で閲覧していただく、というように迅速な画像診断情報の提供を心がけています。また各診療科の先生方との連携と協調を深めていくために、画像カンファレンスを定期的に開催し、診断や治療方針の決定に役立つ画像情報を、積極的に提示させていただくことで、効率的で質の高い医療をめざしたいと思っております。

そしてこれまでの経験を少しでも山口大学および山口県の医療に還元すべく努力を重ねてまいりたいと考えていますので、今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成29年11月1日付けで、歯科口腔外科学講座教授を拝命いたしました三島克章（みしまかつあき）と申します。皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成元年3月に大阪大学歯学部を卒業後、同口腔外科学第二講座に大学院生として入局しました。ここで口唇口蓋裂を専門として臨床と研究に取り組み、口唇・外鼻の形態評価に関する研究にて学位を取得し、口唇口蓋裂と顎変形症を中心とする手術のトレーニングを受けました。平成10年に岡山大学歯学部第一口腔外科に異動し、口唇口蓋裂専門外来を立ち上げて、その診療体制の充実を図り、顎変形症、口腔癌、顎関節疾患等の口腔外科全般の手術の研究を積みました。そして、平成22年10月に山口大学歯科口腔外科学講座准教授として赴任しました。

山口大学では、歯学部における口腔外科ではなく医学部附属病院の歯科口腔外科として、重要な領域である口腔ケア、

摂食・嚥下、そして睡眠時無呼吸にも積極的に取り組みました。そして、前任者から引き継ぎました口唇口蓋裂治療の発展のために、それまでに欠けていた言語外来を立ち上げ、名実ともに口唇口蓋裂の一貫治療を実践してきました。

この度は幸いにも、よく知った医局員とともに新たな教室作りを開始できることとなりました。まず、口腔外科領域のメインである口腔癌、顎変形症、口唇口蓋裂を中心に確固たる診療体制を築き、治療成績の向上を目指して治療法の改善、新規治療法の開発に取り組み、山口県の歯科口腔外科の発展のために努めていくつもりです。また、ライフワークとして取り組んで参りました口唇口蓋裂治療におきましては、口唇・外鼻形態や哺乳・発音・咬合等の口腔諸機能を高いレベルにて回復できるように、新規手術方法、新規治療法を開発し、全国トップレベルの施設となるように全力を尽くす所存です。皆様、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



山口大学大学院医学系研究科
歯科口腔外科学講座 教授

三島克章

山大病院の旬な話題をお届け!

NEWS



骨髄バンクを支援する山口の会から 小児科入院患者さんへクリスマスプレゼント

11月22日(水)、病院長室において、骨髄バンクを支援する山口の会から、小児科病棟に入院中の子どもたちへのクリスマスプレゼント贈呈式を執り行いました。

式では、骨髄バンクを支援する山口の会・猶給美会長から杉野病院長にスケッチブックなどの文房具が手渡され、杉野病院長からは感謝状を贈るとともにご厚意に対する感謝の意が述べられました。



YAMADAI
NEWS



NEWS



「クリスマスの夕べ」を開催しました



12月22日(金)、外来棟1階ロビーにおいて、恒例の「クリスマスの夕べ」を開催しました。

院内保育所「たんぼぼ保育園」の園児よる遊戯のほか、インストゥルメンタル・ユニット「リリック」による演奏が行われ、集まった入院患者さん達はとても楽しい時間を過ごしました。

NEWS



宇部かたばみライオンズクラブから 小児科入院患者さんへクリスマスプレゼント



12月18日(月)、小児科病棟プレイルームにて、宇部かたばみライオンズクラブから、小児科病棟に入院中の患者さんへのクリスマスプレゼントの贈呈式を執り行いました。

式では、宇部かたばみライオンズクラブ・東泰雄会長から杉野病院長にケーキタオルのプレゼントが手渡され、杉野病院長からは感謝状を贈るとともにご厚意に対する感謝の意が述べられました。

贈呈式の後、サンタクロースに扮した東会長は病室を回り、入院中の子どもたちにプレゼントを手渡し、受け取った子どもたちは笑みを浮かべ、とても喜んでいました。

1 病棟 4 階 東

各病棟をご紹介します



1 病棟 4 階東は、新生児集中治療室 (NICU : Neonatal Intensive Care Unit) 12 床と新生児治療回復室 (GCU : Growing Care Unit) 8 床があります。看護師 35 名、看護補助者 2 名、医療事務 (クラーク) 1 名が所属しています。

NICU では、予定より早く産まれた赤ちゃんや呼吸障害・心臓疾患・消化器疾患等、様々な疾患を抱える赤ちゃんの集中治療や看護をしています。GCU では、急性期を脱して状態が落ち着いてきた赤ちゃんの継続看護と退院支援を行っています。部署のキャッチフレーズは、オリンピック

帝王切開手術では新生児科医師に同行し、赤ちゃんの出生時の蘇生に携わっています。日頃から蘇生技術の実践を積むことにより、緊急時の対応が確実にこなせるように努めています。また、治療には様々な高度医療機器が使用されており、緊急時に医療機器の準備や使用が適切に行えるように、医療機器を用いたシミュレーション学習を行っています。

平成 29 年 1 月より面会時間を延長し、面会回数の制限もなくなっています。面会時は、両親・祖父母等の育児支援者を含めた家庭環境を考慮しながら、退院後に向

クの五輪にちなんで「5つの『わ』を大切にし、チームワークのレベル向上をめざす！」としています。

①「話」は対話、「コミュニケーション」②「輪」は連携、他職種、地域との連携 ③「和」は相互理解、協働 ④「二」は対等、患者⇌家族⇌医療者、患者のしあわせ⇌家族のしあわせ⇌スタッフのやりがい ⑤「わ!」は創造性あふれるケアです。

赤ちゃんの救命救急の対応が適切かつ迅速に行えるように、看護師全員が NCP R 専門コース

けた授乳や沐浴(※2)などの育児指導を行っています。退院後、自宅でも医療的ケアが必要な赤ちゃんや育児支援の少ない家庭など、地域社会において継続看護が必要となる場合があります。理学療法士によるリハビリテーション、病棟薬剤師による服薬指導、診療連携室の担当看護師やMSW(医療ソーシャルワーカー)など多職種がかかわり保健師や訪問看護師等と連携を図り、必要があれば入院中からご家族との交流の場を設けるなど在宅移行支援を行っています。

私たちは、赤ちゃんのご家族の尊厳と人権を護り、医療チームの調整者として、チームが最高のパフォーマンスを発揮できるような良好なコミュニケーションを通じてチームを繋ぎ、トレーニングされた高いスキルを用いて安全で効果的なケアをタイムリーに届けることを目標に頑張っています。

※1・日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法委員会主催、新生児蘇生法(NCP R)専門コース
※2・赤ちゃんのお風呂



宇部・山陽小野田救急隊員、JR西日本の方々のご協力で、生まれて初めての新幹線の旅です。保育器越しの車窓からの景色、忘れないでね。



救急シミュレーション



朝のカンファレンス

三好師長より一言

「啐啄同時(そったくどうじ)」という禅の言葉があります。卵の中の雛が殻を破ってまさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側から雛がコツコツとつづつことを「啐」、親鳥が外から殻をコツコツとつづつことを「啄」といいます。小さな命と向き合う現場で、私たちはいつも「啐啄同時」のケアを目指しています。

栄養治療部

季・節・の レ・シ・ピ



ビビンバと言え、

ひき肉を使用したものが一般的ですが、

今回は「えそ」というお魚を使っています。

魚も野菜もしっかり摂れるビビンバ、

おうちでぜひ作ってみませんか？

Today's menu

お魚ビビンバ

栄養成分

エネルギー 250kcal 食塩相当量 1.9g

※ご飯のエネルギー含まず

材料

1人分

[ナムルA]

- ほうれん草…………… 30g
- 醤油…………… 1g
- すりごま…………… 1g

[ナムルB]

- もやし…………… 30g
- 醤油…………… 1g
- 酢…………… 2g
- ごま油…………… 1g

[炒り卵]

- 卵…………… 50g
- 油…………… 2g

- にんじん…………… 10g

[ミンチ]

- えそミンチ…………… 50g
- 醤油…………… 2g
- みりん…………… 2g
- 酒…………… 5g
- ごま油…………… 3g

[たれ]

- 麦味噌…………… 10g
- 砂糖…………… 5g
- 水…………… 20g
- 鶏がらスープの素… 少々
- 豆板醤…………… お好みで

子どもさん向けには豆板醤なしでも！

作り方

[ナムルA・B]

- ① にんじんは薄く輪切りにし、型で抜く。
- ② にんじん、もやし、ほうれん草を茹でる。
- ③ ほうれん草を茎から茹でたら水で冷やし、一口大に切る。
- ④ 水を切ったもやしとほうれん草に、それぞれ調味料を入れて混ぜる。

[ミンチ]

- ① 調味料をすべて合わせて混ぜる。
- ② ごま油で、えそミンチを炒める。
- ③ 火が通ったら調味料を入れて炒める。

[炒り卵]

- ① フライパンに油をひき、炒り卵を作る。

[たれ]

- ① 材料を混ぜ合わせ、フードプロセッサーにかけた後、加熱する。※水分を飛ばし過ぎないように注意。ご飯の上に盛り付けたら完成。

ポイント

- ◆えそは白身魚なので、高たんぱくで低脂肪なのが特徴です。今回のビビンバでは、牛ミンチを使った場合に比べ、約90kcalエネルギーダウンできました。
- ◆たれに少量の鶏がらスープの素を使うことによって、こくが増し味噌の量を減らすことができました！(0.5gの節塩)
- ◆フードプロセッサーでたれをさらさらにすることによって、食材に馴染みやすくなるので、たれが少なくてもおいしくいただけます。
- ◆お酢の酸味やごま油の風味を利用することで、お醤油が少量に抑えられます。



REPORT

私たちの ボランティア活動

栄養治療部

山口大学医学部附属病院の小児科、第三内科の医師と糖尿病看護認定看護師、管理栄養士は、毎年10月に周南市の大田原自然の家で開催される、県内の1型糖尿病患者を支援する『山口会』主催の宿泊交流会の企画・運営に参加しています。

宿泊交流会は2泊3日で行われ、1型糖尿病の患児・OB・OG(今年度の参加者5~50歳)、その家族、スタッフ(医療スタッフ、学生等)など今年度は総勢140名が参加しました。

この宿泊交流会は、参加者が糖尿病について正しく理解することを目的としており、子供たちはもちろん、ご家族にとっても大切な仲間ができる交流の場となっています。

さて、今回はこの宿泊交流会での栄養治療部スタッフの活動を紹介します。

私たちの主な役割は、おやつ作り、野外調理実習、栄養教室、毎食の配膳等です。毎食の配膳は、子供たちがインスリンを打ってから食べ始めるまでに時間がかかり過ぎないように特に配慮しています。低血糖を起こさせないために、スタッフ全員が協力しながら行っています。また調理実習は野外なので、調理内容が限られますが、毎年栄養士が工夫を凝らした献立を用意しています。今回は、魚が苦手な子にも魚をおいしく食べてもらうきっかけになることを願って「お魚ビビンバ」(レシピは7ページ参照)を考案しました。調理は子供たちとスタッフのみで行いますが、年々子供たちのレベルが上が



ってきており、驚かされるばかりです。調理実習を通して子供たちの成長を見守れることは私たちにとって大きな楽しみであり、励みとなっています。

栄養教室は、食品交換表や減塩の話をベースに子供たちが飽きずに学べるよう、かるたやすごろく、ダンスを取り入れ、各年代に合わせた内容にしています。子供たちがお互いに意見を出し合う時間を設けることで、自然と教えあう姿も見られます。また、宿泊交流会での食事を使用し、食品の表分けやカーボカウント(※)も実施しています。

このほかキャンドルサービスや魚釣り、ピザ作り、餅つきなども行いました。充実したスケジュールの中で、参加者全員がかげがえのない絆でつながっていきます。私たちスタッフはその一助となり、見守る存在として今後も関わっていきたくと考えています。

今年2月には日帰りの料理教室も計画しています。興味のある方は栄養治療部までご連絡ください。スタッフ一同、心よりお待ちしております！

※カーボカウント:食事に含まれる糖質(炭水化物)の量を計算する糖尿病の食事療法のひとつ



編集後記

新年明けましておめでとうございます。皆様は今年をどのような1年にされたいですか？

筆者は、厄年ですが、そんなものを吹き飛ばす勢いで、何事にも挑戦の1年にしたいと思います。今年もどうぞよろしく願いいたします。(担当Y)

皆さんからのご意見・ご感想をお待ちしております。
今後読んでみたいテーマ、興味のある記事などお気軽にお寄せください。

FAX 0836-22-2113 E-mail me202@yamaguchi-u.ac.jp

企画発行：山大病院だより編集委員会
事務担当：山口大学医学部総務課総務係

〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号

TEL 0836-22-2007 URL <http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp>